

都城島津家役所日記 14

「安政六 紳(日帳)」〈安政 6 年(1859)〉

「紳(日帳)」〈安政 6 年(1859)〉



都城島津邸

Miyakonojo Shimazu Residence

目次

凡例	3
発行にあたって	4
安政六 紳（安政六年（一八五九））	5
紳（安政六年（一八五九）十月）	25
史料写真	47
解説	95

凡例

- 一 本書は都城島津伝承館史料集第十四号「都城島津家役所日記十四」である。
- 一 本書には都城島津伝承館所蔵の史料のうち二冊を収めた。原題はさまざまであるが、史料の性格から『役所日記』とした。
- 一 古体字・異体字・略体字は、原則として常用漢字に改めた。
- 一 字間や行間、余白等に挿入された文字で本文の補充であることが明らかなものについては、その該当する個所に続けて記した。
- 一 校訂にあたって、本文中に読点（、）と並列点（・）を加えた。
- 一 表紙は、巻ごとにその形状を模し、寸法を記した。
- 一 原本が破損や虫損等により解読し難い文字がある場合は、その字数を計って□を挿入した。なお、字数を計りかねるものについては「」で示した。
- 一 抹消文字の判読可能なものは、文字の左傍にゝを付け、判読困難なものはその字数を計って■を挿入した。なお、字数を計りかねるものについては■で示した。
- 一 敬意を表す欠字や平出等については、一字空けて記した。
- 一 校訂者の加えた注はすべて（ ）を施した。
- 一 印章は適宜㊦・、花押については（花押）と記した。
- 一 本史料中には、現在の視点から見ると明らかに不適切と思われる表現も一部見られる場合があるが、歴史資料としての性格に鑑み、原則として原文のとおり収録した。しかし、残念ながら人権の保護に鑑みて、原文のまま収録することが困難な部分もあり、一部の地名・個人名に限って、その標記を省略し、字数を計って□を挿入した。
- 一 本史料集の筆耕・校訂は、都城島津邸学芸員が行い、その校閲を都城島津伝承館審議会原口泉会長にお願いした。

発刊にあたって

平成十六年十月、都城島津家に伝来した史料群が一括して都城市に寄贈されました。その後、平成二十二年三月二十七日には博物館施設「都城島津邸」が開館し、その敷地内に史料を保存・展示する施設である「都城島津伝承館」が設置されています。

都城島津家伝来の史料群については、市への寄贈後、平成十八年度から二十一年度まで、史料調査事業を行い、詳細な目録を発刊しました。そして、都城島津伝承館完成後は同館において、その史料の展示・公開を行っています。

しかし、同史料を都城の歴史を解明するための資料として活用し、かつ歴史的・学術的な価値がどこにあるのかを明らかにするためには、さらに広く史料の内容を公開する必要があると思います。そこで、史料公開の一環として、平成二十三年度から都城島津伝承館が保管する史料について、翻刻し刊行する事業を行っています。

都城島津家に関する史料集を刊行することにより、市民や

研究者による史料の活用を促進し、都城地域の歴史研究がさらに深化することを期待します。このことによって、都城に関する史料の価値やその意義が広く発信されることになれば幸いです。

発行する史料集は、史料の中から特にこれまで活字として刊行されておらず、かつ重要と思われる史料中から「都城島津家役所日記」を刊行しています。これらを公開することによつて、領主家の政治的動向を具体的に検討することが可能になると考えます。

今回はそのうち幕末安政期の日記二冊を翻刻・刊行します。なお、昨年度刊行分から紙媒体ではなく、都城島津邸のホームページを通して、ウェブ公開することになりました。これによつて、これまで以上に多くの皆様に活用いただき、都城の歴史研究が活性化することを祈念いたします。

令和七年三月

都城島津邸

安政六

紳(日帳)

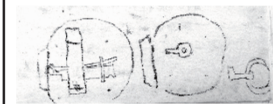
〈安政六年(一八五九)〉

都城島津家史料 ID 01230

(表紙)

安政六

紳



17.1 cm

食物

梨貯様

一 梨ノ毛頭無疵ナルをえらひ、箱の中ニ入れ、窠からをつめ置、風の入らざるやうにして置、^{ユカ} 鉢ノ下ノ様ナル所ノ、風のあたらざる所へ直さず置也

但、二十日越計ニ改見るべし、如シいたミあらハ去ル出スべし、一ツくされ入れハ、外ノなしもいたむ物也

右、安政五年^午九月

一無疵をえらひ、油ノ中^江入置也、但、少シハ油通候ども、其処を去りて吉

右唐兵道者和田仁十郎伝

(朱書)

「試ルミ正月ノ比迄ハ十百ノ渡ニ改方一首尾候」

梅花貯様

(龜)

一 琉球ツはニ梅木を深サ五六寸計なる程入、梅花の枝をさし、或ハ枝をさかさまニつり、つほの口を固く封し置ハ、来春花ノ時節迄ハ吉と、松原^三而喜悅咄、安六正月廿七日

柿梨子貯様

一 柿梨子シブノ中へ入、堅封し置ケハ、吉物と二三咄、試ルニ、シブ氣中へ通りて匂ヒ有ニ、梨子ハ其客宜といへども不食

柿ハ少シヤハラカニナリテ是も不食

安政六

右正月開見ルニ、如斯候得ハ此仕様取止候事

○西瓜・瓜・梅・柿・柑類貯様

一 窠ぬか 一 そまノかす 一 そまから

但、灰^ニ焼

右三品、当分^ニあわせ一ツツ、付かさる様^ニして囲也

○梨子貯様

一 なしハ一ツ、あふらかミニつゝミ、すりぬかにて囲也

○茄ひ貯様

一 秋茄ひの皮の厚ヲ取り、酒のかすに糲ぬかを合せ、日にほし、粉にして一ツ、囲也

但、夏茄ハ皮薄く囲様とならず

右、安政六五月

宮田

要人介伝

(朱書)
「右三品何れも風の当らむ所江入置候由」

○庭鳥、鳥やニ栖ざるを栖する方

一 鳥やを東向ニ直し、鳥の栖なるを取り、ぬるき湯ニ而足をぬくめて鳥やニ栖しむる也、明日栖されバ、再へし(す脱カ)

右杷前院ノ伝咄ノ由御咄也、安政七三月十日

○ミそつけ百年ニ而も宜法

一 (麵カ)こぶじ 一と

一 大豆 三升

右之に汁 (煮) 三升

一 しほ 一升

右ハ下り掛、筑前二田村有たや江小休致候処、ミそ漬段々

出か成も宜敷、新古と相見得候ニ付尋候処、古きのハ百年位の品と申ニ付、ミその仕込様尋候処、右之通申也、娘みよ十五才、伝法二月十四日也

土器 試土 安政六己未ヨリ

一 志比田土 い印

一 やね谷土 ろ印

一 い印 志比田土

(朱書)
「右之土ハ四月田地作式候処、相不出来上薬試候処、紛失致候由、去七月十九日、上薬」

(朱書)
「ろ印」 やね谷土 「△試としての印を以遣也」

(朱書)
「ろ印地土ハ上薬ニ相成ぬの印付置」

(朱書)
「は」△ 宝屋内黄浮石

(朱書)
「右同断ニ付ル印付置」 志比田土半分交セ

(朱書)
「右三土器作方致候得共、不相出来、上薬掛試致候由」
一 い印土ハ見不出候

右、安政六四月、海老原焼試相成候」

宮丸

〔朱倉忌〕に 岩興^{ぎん} ■ なんノ木

北脇ノ七手下ノ土

同所

〔朱倉忌〕に 岩興権現ノ後十文字道バタ西北ノ

角ノ畑ノ下ノ土

安六右六月取方

〔朱倉忌〕

〔朱書〕へ 小杉原

〔此土二種ニ而ハ不出来、へ印土茶はん一ツ、に印土茶わん二ツ交セ土出来也〕

〔朱倉忌〕

〔朱書〕と 穢多村土

〔右■へ印土外も一種ニ而作候へハ、底ひはれ成、不宜様相成候由、九月十二日海老原申出〕

(二丁空白)

上掛薬試

〔朱倉忌〕

〔朱書〕い 上薬石

〔朱倉忌〕

同 ○ 焼

〔朱倉忌〕

同 ○ 寺柱鹿倉岩

〔朱倉忌〕

同 ○

〔朱倉忌〕

同 ○ 大赦石

〔朱倉忌〕

同 ○

〔朱倉忌〕一に 池之坊桃色砂

〔朱倉忌〕一へ 児玉大明神窟之砂

〔朱倉忌〕一へ 虎山軒頭ラ河原者

〔朱倉忌〕同 ○

一と 宝屋之内黄浮石

〔朱書〕

〔無朱引ハ見なる候由〕

〔朱書〕「右安政六四月海老原方焼試相成候」

一ち 小杉原

一り 志比田土

〔朱書〕

〔此土地土試候处、不用達上薬ニ試也〕

一ぬ やね谷土

〔朱書〕

〔此土ろ印ニ而地土試候处、相不出来上薬ニ致ぬの印付置〕

一る 宝之内 黄浮石 志比田土 半分合セ

(朱書)

「此土同断二付、るの印付置」

(朱書)

「安政六四月海老原試也」

(三丁半空白)

一金 二金 三火欠

四木 五木 六水

七土 八土

(半丁空白)

覺 菊養試

一金競 鹿ほね
鴨ノフン

一鵜飼火 ■
鴨のフン

一吹上 鴨之フン

一猩々 鹿ほね
どぶ

一吉野山 とふ

一金天 とふ

右、二月十二日養方

一 (マ)

(半丁空白)

盃の月の光の満■ぬれハ

心も清く蛙なくらん

盃の中まで月乃かゝやくハ

くも無き夜のしるし也けり

我宿にけふ咲初む梅のはな

ちらんかきりハ匂ふへきかな
ちらんかきりハ匂ふへきかな

(朱書)「いくよの春か香に匂ふらん」

安政五冬至帰

一筋の糸の日あしの添ぬれハ

はやくもねこの春やくるらん

大寒の夜、昼より暖なりけれハ

(朱書)「安政五大寒之夜、暖を取りけれハ」

(朱書)「家貧民の心乃とをりてや」
や通りけん

かく暖き夜ハくもるらん

(朱書)「夜ハ暖き成りけるかな」

(朱書)「咲初し都の洲辺のさくらハな

かすみ(宋書「くもり」)そして酌そ嗜き
(宋書「かぎて」)

三月、霧山温泉■ニ遊て

○(宋書)高千穂の深山かくれのさくら花

いまこそはなのさかりなりけ(宋書「れ」)■

○(宋書)大空の月ハ雲間ニ残けん

(宋書「なのり」)しらへ初たほとゝきすかな
(宋書)

(二丁空白)

三月三

一晴時々西風、朝曇り、雨無時々晴

五日

一曇り南風

六日

一雨 七ッ■夜曇り晴風西

七日

一南風時々雨、雷鳴有、夜霧洲大雪

八日

一晴、西風ツよし

九日

一晴天 一十日天気晴

一十一日、曇り紐沖雨

(半丁空白)

三月三

一清明、西風、朝曇り、雨無時々晴

五日

一曇り、南風

六日

一雨 七ッ一前夜曇り、清風西、日ナシ

七日

一南風、時々雨、雷鳴有、夜霧洲大雪

八日

一晴、西風ツよし

九日

一晴天 一十日天氣晴

一十一日、曇ノ冲雨

(半丁空白)

寛政五 十二月ヨリ

時ノ数ノ占覺

獸



地火明夷



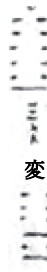
地雷復

断ニ云、地ハ大ニシテ、火ハ見事ナル■モ様有、明夷ノ夷ニ
テ、日本ノ獸ニテハアラス、変卦ヲ以テ考ルニ、雷ハ猛獸ナ
リ、復ハカエルナリ、サレハトラハ千里遊ニテ、千里カケカ
ヘルト云モノナレハ、此獸トラナルベシ、果シテ然リ

(半丁空白)

鳥

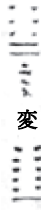
地雷復



地火明夷

断ニ云、地ハ大ニシテ、雷ハ猛鳥ナリ、復ハカヘルナレハ、
此ハ渡鳥ナルベシ、卦ノ象ヲ以テ見るニ五メメノ陰卦ヲクビ
ノ長キトリトシテ、下ノ一陽ヲ短足ト見、又定部■ニ立テヲ
ル鳥ト見テ、変卦ノ火ハ見事ナル事、アル鳥夷ニテ見レハ、
日本ニ居ル鳥ニテハ非ス、厂ハ能節ヲ知テ来去スルモノナレ
ハ、此鳥厂ナルヘシ、果シテ然リ

地澤臨

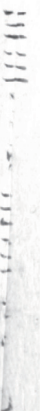


地雷復

断ニ云、地ハ大ニシテ、澤ハ水鳥ナルベシ、卦ノ家ヲ以テ見
ルニ、四メメ陰ヲ以、クビノ長キトリ、足ノ短キトリ、サレ
バ此トリハ鳩ナルヘシト云、コレ疊ナリ、此占時ノ数ニテイ
タスコトナレハ、空ニ土風致、復ノ字迄ハ考ツカス、ノコリ
多ク存ス

花木并樹

澤雷隆



水電屯

断ニ云、澤水ハ過半梅也、又白色、雷ハ大ナルカタキ木也、

変卦ノ水ハ赤色ナリ、象ハ五蕊ノモノ、是ハ梅ナルヘシ、果シテ然リ

火風鼎  天風姤

断ニ云、火ハ見事ナル花、離ハ赤象ヲ以テ見レハ蕊ノ大なるモノ、中ノ三湯ヲ以テ見レハ、固キ木ナリ、離変シテ乾トナルトキハ、花落テカラ丸キ固キ実ノナルモノナリ、コレツバキナラン、果シテ然リ

(半丁空白)

花草 并草

地天泰



初メメ変



■天
風姤

断ニ云、地ハ黄トス、大ナルトス、天ハ健トス、固トス、花ノ大ク黄色ニシテ、卦ノ象ヲ見レバ蕊ノ多キモノナリ、乾ハ能立ノビテ、固キカラノモノ日車ノ花トモ見ユレドモ、初メ

メ変ナレバ、年々旧根ヨリ生スルモノト見て菊と云、果シテシカリ

雷風恒  五メメ変  澤風大過

断ニ云、雷ハ大ナルモノ、又動モノ卦ノ象ヲ見レバ、上ハタガリノモノ、巽ハ風ニシテ、風背テ能動モノ変卦ニテ見レハ、カラ立ノ延タルモノ芭蕉ト云、果然リ

(半丁空白)

器物

(半丁空白)

鳴虫 并虫

(半丁空白)

魚

火水未濟  六メメ変  雷水解

断ニ云、火ハ見事ナルモノナレドモ、此断中々六ヶ敷、象ヲ以見るニ、大小大小ト有ル象アリ、変卦ノ雷ハ猛魚ナリ、口ノ大ナル象ニシテ、水解ヲトリ、未済ノカタチヲトリテ、此魚、鯨ナルベシ、果シテ然リ

山雷頤  変卦不覺

断ニ云、山ハ止ルナリ、雷ハ猛魚常ニ静ニ居テ時有てハ、猛ナルニト有、此卦の象を以見るニ、頭尾ノ固キ魚ニシテ下ノ雷ニテ見レハ、ハジキノツヨキ魚ナリ、鱗ノ能ソロイタル魚、又四五メメノ間変シケレハ、躍テ水上ニ出ル象ト見て鯉也ト云、果シテ然リ

(六丁空白)

一防風ハ一年、生葉ナク有之由、薬店杯ハ二三年之大なるを

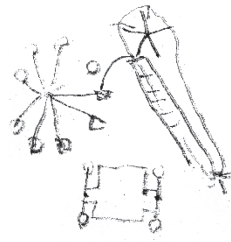
貴フ由

一キナノ  ハトヂノ木之由、玄岱咄

一栩皮の事、キナノ亜葉ノ由、試ノ事

一鹿珠黒木方御賞之事

一小菊紙十束位、能時節スキ方の事



一柿ハ蟹ト同シク食フナカレ、右花鏡ニ見ル

一芭蕉ノ切口ヲクボメ、其汁ニ  紙ヲ合セテ書物ノ表紙ニスル由、琉人方唯吉聞出ス、安政五九月

一榼藤モタマー名象豆

一浣草  天門冬

一蘭子ムベ

一虎耳草ハ小兒耳病ヲ取汁滴入、即愈、右花鎖ニ見る 俗云ハガタ

一野薔薇花患扈春烹飲即愈同前

一鴛鴦藤、一名忍冬又金銀花

一鳳仙子、俗名急性子、庖人煮開物著三粒即爛古花鏡

一牛膝イノコ  ズチコサシ也

覚

一直や桜十本位 一江戸しぼり二本

一本田桜一本、但、川上氏江頼ミ置

一野辺山茶花一本 一日置山茶花一本

一浣香ノ入タル薬ハ通ジ無之節ハ、シヲを二分位入テ用レ

バ、三黄丸を二包位用候よりも能聞と喜悅咄

一牡丹上厚 一孟宗竹

一帖佐杯大根ヲ作ルニハ、夏ノ時分さゝげを多く作り置き、

秋の時分大根ヲまく時、其さゝげを畦の下ニうつめ置、其

上江大根をまくと玄達咄

但、さゝげハ大根を蒔比、花の出ル様致ス由、さゝげの手

ハ立スシテ其訳植ルよし、コレ帖佐杯の作様ノ由

一小兒口辺ニ水カサノ出来タルニハ、正月十四日用ル川柳ノ

木をアブリ、其油をツクレハ、二三度ニシ方ヨキ物ト玄達

咄也

覚

一拝歳蘭一体 一 心蘭一体

右伊知々直次郎殿方江預ケ置、十月十九日

一(虫欄)柿福山ヲ参ル、大物重サ百目

□(虫欄)安政五十月廿五日

一天門冬蓋物江漬置

右漬様、兩日夜シヲニ付、石ヲヲシ洗去リ、砂糖ニツケ置

右十月廿七日鹿兒嶋

一珍珠菜 一蔦蘿 ルカウサウ丁セアサガラ

一女青 一土荊芥一鹹蓬 マツナ

一石龍膽ナヲ ハルクンドウシベ

一礪沙ハ氣付ニハナラス、五里カ一分カ 子ツ氣有、煎薬ノ中

江入て吞て吉、又沈痾ト前同断の掛メニテ渴ニテノンデ吉

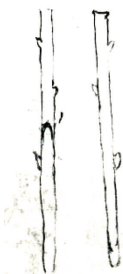
一猪膽ハクツノ粉ト橙皮油をまて丸薬ニシテ留飲ノ薬

一笹印茶ノ養ニ流外ニみまやニも書

一笹印桑之木仕立の事

一進上用山芋

梅接根





右不拘長短、以留三眼為規無不接と、手持名繩瀬之者伝之由、五平太咄

安政六正月

一徳り一ツ

右ハ梅すを三四寸位深サ有様ニ入レ、梅の枝をさし置、風の入ぬ様、固ク封し置、寛政六二月

四日

雉子

一へり前、正月十五日初音

一庭雉子二月六日、四ツ前初音

一松原桜盛、新左衛門首尾三月一日

一松原後ノ方、桜三月四日

一外屋敷桜、三月三日

一弓場之前桜ノ三月八日 一花原桜、三月朔日

一安土かりや前桜、三月六日 一青麦梅、正月廿九日

一垂糸海棠、三月五日

上 上

一うすき梅 一のさハの梅 印肉皿付

上 きうす

一ふた物うすき梅 一ふた物 淡交 中品

一小ふた物 き梅 上

一紙之儀、用分不足ニ付、■等之儀被調方申渡候ニ付、役所

申置候、三月十一日

一桑原蔵助所、西瓜当年第一之大

一西瓜廻り三尺四寸、重三十斤

右七月廿五日重富江進上

寒さらし入箱

一立一尺二寸五部 一高二寸五部 一横一尺五部

一仙人掌之肥ハ灰ニ小使ニテ■ヒタシ養トスレハ、葉赤くな

ると中里咄シ候、(虫摺)「」

貯物

一 つふ 一ツ

大者 栗 此内少し出ル 百二十四、梨 ■^三、厚紙の袋^二入置

安政五九月朔日

二 同 一ツ

右^者 きやう柿七ツ、みかん七ツ、脳なしたる白砂の中取い

け置、同年九月 ■■■■■ 九月十五日

梨子七ツ、九月十三日

一 西瓜 二ツ、花 ■かごの中^江入、しらすとよく ■なく置也

安政六十月

一 吉野山 〃い印

一 猩々 〃い印

右、遊園所預置、八月五日

一 金天 〃

一 金競 〃

一 咲瓜 〃

右、次左衛門殿 同日

一 吹上 〃

一 花の根 二ツ

一 金天 〃

「 (虫 摺) 」 同

安政五八月廿日 大梨子重富を参ル、掛め百四十一匁

新納家方さねなし柿参ル、掛目七十一匁五分

御用ねり

一 薄荷七斤 ■

右、安政六春 ■芽

安政六二度目

一二番ハ去十二月比也、七月廿三日ハ三度目 一九月廿八日

方福山通行之節 一十月十八日方出立之前日也

(半丁空白)

琉球注文

一 黄紅蝶 種子根之方

一 仙人草 一フソウ花

一樺 デーゴ 琉字
同語 一バンシルウ 木

柿の根ナル味石榴の如し

右安政五年九月十四日許田親雲上江注文

(×)書人抹消() 蒔
一 福山植付 安政四二月
実 ■

一 梨子 一 柿 一 栗

一 きり嶋つゝじ 一 孟宗竹

右琉球人御返し

一 栗七ツ ⁺ 鹿庭江植置、琉人遣候様

(虫損)
鶏□ 九日暖 二月一日方八日迄

一 い印 万種顔 一 西 ■ まんだら

一 ひおふぎ

一 ろ 紺 白しぼり 一 白まんだら ^{黄カ}

一 は 一 てせん

一 紅しゝ

右之種、二月九日蒔付試

(半丁空白)

一 巴豆三本 一 カンラン一本

一 二度成ミカン苗 一 キコク 苗

桑原蔵助所西瓜

安政六当之大

一 三尺四寸廻

一 掛目 三拾斤

七月廿五日鹿重富江進上

(原空白、ここより冊子別綴)

一 紙之儀用分不足ニ付、申請等之儀取調方申渡候、頭役所方
申

三月十一日

五月

一上洛ニ付旅金不足ニ付、相葱様々方出方及候間、高買ハ其
通りニ而出高申、下ケ直ニ買上^ニの儀、其涯取持無之様伺ニ
及可然申置候、以上
也、五平太取次

一読料不足ニ付、当年中十五挺ツ、張方之儀、当年中取止、
修覆具足ノ四ツ七ツ迄候、五右衛門儀ハ八郎右衛門・小兵
衛・太藤太是迄ノ通り
可然達

五月廿八日

一麦 壱石

代拾四貫文

五百下り 拾三貫五百文

一あわ 壱石

代六貫八百文

五百下り 六貫三百文

五百下^ニ而申受候段達也、甚五兵衛

■月二日

一■清兵衛・惣右衛門、鹿^江差越居仕候へく候、良四郎方
内々申候

六月六日

一野田源兵衛、宗躰^{横目}■当分之通^ニ而油方一方勤初、平太左衛
門方申、可然達、取次新右衛門

八月

一ギランノ山門バ、ノリ通りける、宜敷間以後モ可然達置^(ヤ)
也、弥一郎正月中

諸払台所 都

一錢百六拾三貫百四十六文

同 鹿

一錢九貫六百五文

諸払納殿所 都

一錢貳百三拾壱貫六百八拾七文

同 鹿

一錢五拾六貫百六拾四文

同 十一日

一庭鳥一羽男 林太郎^江吳置也

右四郎取次

二月中諸払

納殿所 都

一貳拾七貫七百貳拾文

台所 都

一錢百貳拾壹貫五百五拾九文

常調

一錢八百四拾七文

台所入方

一上味噌四斗貳升

飯タギくゝり

右小者かこ■買下候申受

一同

右此節仕方相成分

同十■日朝

一切通し外地面小者かこ共へ采園場として遣し、四郎取次、

嘉平次方へ達方相成候

二月中

一_い台所 一_い台所 鹿

一錢七貫六百六十四文

納殿所 鹿

一錢二貫二百八十文

七月三日

三月中 台所払 鹿

一錢七貫二百二文

納殿所 鹿

一錢廿五貫五百廿四文

内貳百二十四文 草り三足

一_い納殿 都

一錢四百四十六貫九百八十九文

常調方

一二百七十八文 十二月朝迄

台所払

一錢九十三貫七百五十七文

但、右之常調者込ル

同所入方

■

一 ■みそ四斗五升 壹人ニ付三升ツ、小者三人飯焚代御手
手伝かこ六人、下手伝壹人、式升納殿所兩人

七月十日

一 忌中ニ付而ハ、雨とひの大ニ取方宜ニ付達也、弥一郎取
付、当日御札 ■正応寺薬師賄ハ、我等 ■共々武運長久
之為 ■ニ而 候由、是ハ忌明次第と申置也

四月中

台所方 都

一五十四貫六百六十七文

内二百五文ハ常調之払迄込ル

一 みそ二貫二升五合

右小者三人、かこ六人飯焚くゝり、 買物夫申受

納殿所 都

一八十三貫参百八十五文

納殿所 鹿

一三十七貫七百文

二行取込

台所 鹿

一一貫四百五十六文

七月廿五日

一五人以上三十二人、三人 ■ヨリ四人迄百四十八人

右例年之通、栗百九十二俵、石ニシテ四十八石

七月廿九日

一 今度御竿入ニ付而者、皆共なげ書ニ而ゆふ ■ひんかへ被下候
様、郡方之衆へ願ニ相成筈、平次右衛門方申、弥一郎取次

八月廿六日

八月 ■改

一 役所蔵石箱格護金子 ■右之通^(左)

一 小判金一万千九百八十兩

一 二部金十切

一 一部金二千六百二十四切

一 文銀五百目

但、板十一

但、玉一ツ

外ニ

一 いん子金十六

一古小判十七両

但、焼物

右二行、兵具所格護之内取揃

■石箱_二入■付也

六月中

納殿所 都

一三四貫九十三文

安政七年_後三月十七日_{○三月廿八日朝嘉府着}

二月中払

鹿 納殿所廿五日方

と

一八十七貫九百六十九文

三月中

納殿所払 鹿

一四十三貫五十文

万延

右改元三月_{こゝ}一於御城承知、三月十九日

一佐多方持帰りの巴豆之美、福山_江蒔置候処、去年_方初_而ミ_寒着也、尤ミハ古キ程良と喜悅咄也

(二十丁空白)

未正月四日

諸払 御私台所 都

一錢百六拾三貫百四十六文

同 同 鹿

一錢九貫六百五文

内輪方払 納殿所 鹿

(三丁空白)

役所藏石箱格護金

一壺万式千六百四拾壺両

錢_ニシテ九万四千八百七貫五百文

一外_ニ五百四貫貳百八拾八文

右当分物奉行封印

午七月廿二日調への由

六月七日書留置也

徳

笹

ハカタ帯地

ヤガラシ

四匹 壹疋付一両

(半丁空白)

注文

壹尺一寸

なべ

一ツ渡一尺位 江戸

一絲の具 京都

一ツクリカンキリ 大坂

一半股 一ツ

一御湯カタ詔の模様 一ツ

一二見浦二ノ岩之高サ〇岩之所潮汐所方何間

一天然水 大坂

一ふた明 如露

徳

一ふろ 底ひきく

一ふろ 土産用 ■用二ツ

徳

一丹荷

一丹荷 土産用

笹

徳

一腰帶赤縮緬白毛入

一馬のり 一両

一白地

一八百八十七文 五急 五ツ

一百廿文 小たひ 二尺七寸

一三百七十文 あま鯛四ツ 尺

一八百四十文 同拾七 七寸

一四百六拾文 小鯛拾五 五寸

一壹貫三百七拾文 あま鯛十三 尺一寸

一壹貫貳百拾文 同拾五 五寸

一百八拾四文 同 三ツ 八寸

一壹貫六百文 たこ二盃 大

一百八拾四文 赤貝 六十 大

一貳百六十四文 生こ 二百六十目

一五百文 小鯛六ツ 八寸

一 老貫五百文 同 十八 八寸

一 三百九文 かつを一 五百四十目

一 老貫五百文 大鯛二枚

一 九百八十三文 しび 老貫四百八十目

一 百五十四文 赤貝五十 大

一 四百四十文 ■鯛 老尺五寸

一 老貫五十四文 ■干 鯛十三 九寸

一 老貫百三十式文 小鯛三十老 七寸

一 五百廿文 かな頭十^(かし) 八寸

一 三百六十四文 小あち四十四 五寸

一 三百三十二文 小鯛八ツ 六寸

一 二百四十八文 くづな三ツ 八寸

一 百六十八文 耳鯛二ツ 九寸

一 三百四十八文 鯛十六 四寸

一 老貫三百四十八文 同六ツ 一尺一寸

一 五百三十二文 同二ツ 一尺二寸

一 きし 一羽 三百文

一 二百文 庭鳥 一羽

一 八百八十文 鯛二ツ 一尺五寸

一 七百六十八文 しび一ツ 百四十八目

一 式百四十八文 糸より 三ツ 七寸

一 廿文 きひなご 五合

一 ■式百拾八文 死蛇 粕平七十

一 ■二百拾八文 茶やきまん中七十

一 八十四文 糸^(より)三ツ 六寸

一 五百卅一文 中鯛三ツ 一尺

一 六百十四文 大鯛二ツ 一尺三寸

一 九十文 耳鯛一ツ 一尺

一 五百文 鯛十式 三寸

一 百六十四文 あち五ツ 八寸

安政七^甲年

一 四十四文 す 一盃

一 四十文 焼とうふ 四十

一 百四十八文 とうふ 二箱

一 一貫六百元 杉原一束 中馬辰之助

(半丁空百)

外

一七十六文 二十七匁

一八十四文 三十目

一百二文 三十五匁

(半丁空百)

一藥園方用事之節可出事

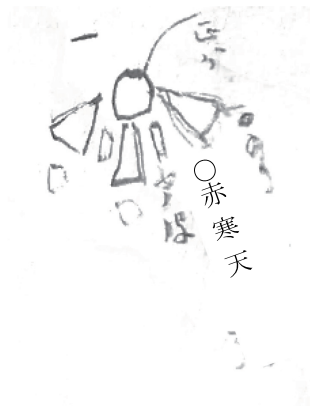
一歲暮遣候事 一鹿府参候ニ付土産進上之事

(四丁空百)

一六月晦日、仁左衛門半日ノ仕事

紳(日帳)〔安政六年(一八五九)十月〕

都城島津家史料 ID 01236

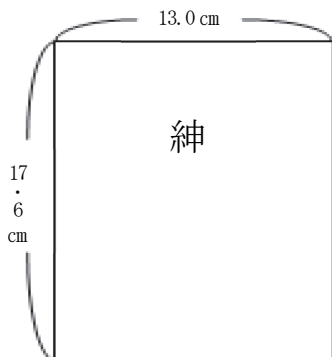


略シテ

采権印□一尺三寸七分

○赤寒天

喜作



注文

江戸

どちよふなべ一ツ 渡一尺位

大坂 大坂

一絵ノ具 一ツクリカンキリ

徳

一半股 一御浴衣鯉の模様

徳

一■小倉馬のり 一反一両位

但、白地

徳 土産用

一ハカタ帯地 一風呂一ツ 小丹荷二ツ

但、底から様

笹

一腰帯赤ちりめん 白が箱入 一さらし四匹

但、一匹付一両

大坂

一天然水一ツ 一ふた明 如露一ツ

一二見浦岩之高サ同所潮干陸迄ノ間

同二朱一代

一髪さし

一白粉紙 女之絵有

(マメ) 一三付 三十二文位

一酒中花

一かつら三ツ位

一タシ玉

一錦手茶わん四ツ

一自分用女之絵盃茶碗

大 三ツ堂
三通り

一打調糸一ツ分

一びん付

一ゴ石

一タハコ入 古金乱

一扇子

一タ紙入

一山まい紋ちりめん 八尺

徳

一村田張きせる二本

徳

一タ下結一ツ 重糸打白地ニ所々此糸染付

一すきや一反

紫 ■嶋入

徳

一神明之前番ヒ玉十斗

一きし嶋一さらし 同嶋さらし

一扇子二本包 一真書筆

一火打石 一入舟

(二丁空白)

登口説

一旅の出立観音堂、千手観音伏し拝ミ、こかね杓とて立別る

一袖にふる露おし払ひ、大道松原歩ミ行く、行けハ八幡崇

元寺

一新地高はし打渡で、袖をつらねて諸人の行も帰るも仲のは

し

一沖の側までをやと子兄弟つれて別る、旅衣袖と袖とのつゆ

なみた

一舟のともつなとくく、船子の勇て真帆ひけハ、風やまと

もニ午未

一又もめぐり逢御縁とて、まねく扇子や三重城、残本美崎も

跡に見て

一伊平屋渡立波おしすへて、道のしまく見はたせば、七嶋しちと
渡中もなだやすく

一もゆるけむりハ硫黄かしま、佐多の美崎もあいるならで、

「ゑい」あれに見ゆるは御開門ふし見まかふさくらしま

山川や日さけ前の浜迄も

下り口説

一さても旅ねの仮かまくら、やめのさめたるこぢして、きの
ふきふとはおもへども、はやく九十月なりぬれハ

一やがて御暇下されて、使者の面々皆揃て弁財天堂伏し拝ミ

一いざや御飯や立出て、滞在たての人々ひき列て、行屋のはまに
て立別る

一名残りおしけか船子共、よろこびいさんて帆ほあけぬ祝の盃
めくる間に

一山川やまみなどニ走し入れバ、船の改めすんて又、いかりひき
のセ真ほ引ケバ

一風やまともに子丑の方、佐多の美崎も跡に見て、七嶋渡中
もなだ安く

一波ちはるかになかむれば、跡や先にも供船の帆をひきつれ
てはしり行

一道のしまく打過ソキ而て、伊平屋渡立波おしそいて、残本美さんば

崎にはひ並ならで

一あれく拝ミ御城元並の御嶽も打つち「ゑい」
〇おしろやちの〇

袖をつらねて諸人の迎むけに出てたやみゑぐすく

親子引列れとて嬉しや

右、安政六十月十八日写

安政六十月十九日

一五半登城、水上二十人、使ノ客、一横井、三原越右衛門

一水上ノ上ノ原、晒の色、横井昼休松の木のかたはらの、さ
ても書居る所「しはらく有て八十蔵事由「日入前八十蔵着

「名物おこし米白キ丸申品「酒やハ有候得とも、当分きれ
て鹿方参候之事

一晚、喜右衛門登候儀十八日

同月廿日 安楽以右衛門所 雨天

一八十藏燐煙引定、苗代川壺や石之段、此前御宿市来・串木野之内五反田御休場所、橋の先高き所社の様なる所、一市来ノミなど人馬頭、其先シテハマヒロシ、アブラヤモト右如小松木植有之内薩摩山手前途中白石有、其先赤石有、向田御飯屋川の向、大小路宿、此辺川はハ一町半計鯉二本、一尺六寸、惣長二尺四寸、一本一尺一寸位、酒一樽、平佐より貰、役人及也、
田原拾右衛門

廿一日

一川降り、昼すぎ八幡^江参詣、前野原鳥井迄二町、惣三丁御社、右ノ方田地藪山を通り出切、左右田、路戎ノ方向
一高き郡境ヲ木一、川石橋有、湯田峠小休、松木海道、山中右之方高ミ^江休、昼休、一里手前、一高城郡之内西方坂ノ上右^江海見得、コシキ嶋見、一西方宿川尻浜付い^マわし宿亭子跡々新宅ハ沽ハ沽被申、六六おの方いろく、一あくね大川人馬次立宿、鉄砲四丁あり、不動ノ絵にて、一香ノ出ル宿、手前左右田しおはに大ばしを掛ル、あくね宿へ入前あわひ茶名物、川上八郎左衛門殿屋敷
御手洗
●廿二日 あくね立

一同所町出切御かり屋、其先大砲五丁、其先右十七八丁を離レて、郷嶋鹿多シ、大御隠居様、八代より此嶋^ニ社有、拜殿ハ通り^{左ノ方}右ノ海^ニ有、四方明キ、此間平地踏付「^ニ是先石キザ少シ有、」此道左ノ方脇本也、天草^江通船候由、野田境末路之西^ニ有、高尾野ノ境川土橋あり、本曙橋左^ニ人、上使路通り、此方一里位ノ辺、入口ノ畦、ひめツばき多シ、出水境御新田ミぞ筋に^ニ木立ミそ三ツ位、麓方一ツ位ノ水上、右人家天草人ウツリ居

川ノ上通のひ取揚方川渡り、米ノ津^江ツ時分着、野村源四郎宿客屋、廿三日、晴、七ツ半立、肥後入、水マタ昼休、歌坂同所三太郎、忍^ニ大郎山中、忍^ニ峠有、暫進眺北、^マ天草・肥前大村見ゆ、湯之^マ浦宮嶋十助所立宿、イナリ有ク^マフ成ル、同峠有、佐敷泊浦方満湯有^{天部欄外}
「めし二十銭、汁十八、付^ニ二ツ、二文」

廿四日

一七ツ半佐敷立、後の山佐敷大郎越、田ノ浦立宿^{小木}暮崎弥十所新宅浜沙ぬり、熊本菓子・梅干出ル、赤松太郎峠・ひなく

(原文)

温泉有、立寄見る■■■■彼■■舟より■■町側へ暫山

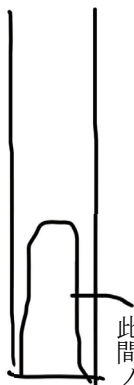
歩、向へ石ノ方大庄や水車有所、石庄やくまけ渡りより萩

原村 ○八代宿客屋フスマ紅石すり有所

○燈台ノコトヲ燭台と云、○紅ヨリツルノヲ燈台ト云、○

カンナベヲ○チョシナベ○ジミヲ燈心ハニヒニヲ

此間ノ皮五六部ノコル



一尺八寸後切片

八代

一酒一升 二百四十文

日なく御鉢浦

一めし十六 一汁十八

■■

一めし

■■

廿五日 八代立七ツ半

一種山大庄やヲ田貞之丞所小立、菊花枯葩有所、○宮之原町

此町ハ間ノ町宿也、小川町中ニ土橋有、其先ノ町吉沢善兵

衛所昼休、吉左衛門字段々有、瓦ノ葺所有、右ノ前切左右

田村有、川江村下川江村上リ、○豊福キ三角屋清蔵所小

立、田中茶屋路方左うと、肥後二男家持切三万石、高里小

立川尻之川船渡シ、川尻宿山城屋新藤吉左衛門殿掛口鯛、

菓子、まん中、はます出

十月廿六日

一七ツ半川尻立、下本町赤星伝三郎立宿、供仕度遣城■■下

通、此通筋門五ツ通ル、此間ハ步行、上本町立宿、蕪木一

三郎所仕度遣、町出切より大過ニ出ル、亥ノ方ニ向、植木

昼休、

(原文)

出切先ノ方、路北ノ方ニ向、左あすなる山み

はりの宿、横の町小立、但、山鹿江一リ半手前、○手前の

田ハ山鹿の内、入口ニ川有、土橋有、山鹿本陣早川五郎左

衛門

廿七日

一七ツ半、山鹿立

山名村

一光行寺小立宿、此所ニ而挑灯引、古江町やめや善兵衛小立

川有、土橋、南ノ岡町昼休、角屋甚兵衛所、是ヨリ■■田

中、右大津大明神、坂ノ上外村筑肥境木熊本ヨリ十一リ八

丁二十間筑原駅小立、瀬高町、右ギラン同町飯屋小立、こ

レ方くるめ領一町位、シテ境右き土橋下モ水車之所羽犬ツ

カ宿御茶屋

廿八日

一羽犬ツカ七ツ半過立、一丈之境や喜作所小立、愛護松原左

ノ方東田寺御祈禱寺桜尾小立、下高羅右之方山高羅山、右

之山之下府中長崎屋末吉所小立、鯉一本献棒頭方鯉一本一

尺三寸位、本かモ二番、右町出切左之方蔵有、其向フ久留

米の御城下、白か城の見得候所、右ノ道豊後通り、筑後川

船渡シ松崎

(原空白)

昼休、乙熊様宗嶋造酒製ノ処、筑後境

右立筑前山家

(原空白)

宿

廿九日

一七ツ半立、冷水峠小立、内野小立、挑灯引天道町渕之上一

六処小立、飯塚宮崎善兵衛所昼休、○小武之田村道榮庭小

立、○当月十七日晚迄、御本丸御焼失之御飛脚通る、能方

■町出切川有、船渡、此川ハ小倉迄流候半、舟帆掛通る、

○取納ハ米大豆の由、すぐハ自分勝手ニ致候由、木やノせ

町中村源平所宿

朔日 晴

一挑灯引連、木屋之瀬立、石坂いちふの木定右衛門所小立、

上之原天満宮庭小立

(原空白)

黒崎海老や仁右衛門所 宿

塩

十一月二日 晴

一四ツ半時分、黒崎出帆、大鐘前下之関江着、焼物屋見物

三日 晴

一下之関日出前出船、前田江二時位世話掛り致、夫方田之浦

江一時半■掛りニ仕候、其内上陸致、夜五時分北東風ニ相

成、此処ニハ難居、下之関江コキ、満月夜五ツ半時分田

之浦方下関迄半り位

四日

一下之関滞船上陸致

松崎解纜着下関絳裙含情露紅顔離人昨夜青楼宿今日船中心

自閑

五日

一■昨夜八ツ半時分、下之関出帆、昼八ツ時分徳淀江半時位

■しを掛致、夫方益順風ニ而、上ノ関江夜五ツ時分着致

ス、海上三十六リ

六日

一北東風ニ付滞船、左ノ方室ノ津ニ取付、はなれ嶋相応^右上ノ雨也、宝ノツ見物致、暫■黒崎問屋御立寄、木先嶋見合セ也ハモ一ツ一尺八寸、○此日魚一ツ 一尺二寸 一朱、一ベ四度之由

七日

一なま干一ツ 大廿四文

一五ツ半比上ノ関出船、おし船昼過あけノ塩江半時計塩掛致、矢張おし船ニ而沖之かむろ江五ツ半時分着、夜雨ふる也
一風強く嶋能見とも
八日 海上七里こぎ船

一沖かむろ江帰船、時々雨降也、昼八ツ時出帆、順風ニ而つわ江暮時分着船、舟もゆり候ニ付、役所江申、夜四ツ過時分陸江上り、次兵衛手当ニ而酒宴一宿致也、海上五里ト申事候得とも八リ位之海上と考候

九日

一日出時分つわ出帆、日入少前あき之御手洗江着、海上十三リ、服白一、一尺五寸、但、め方四匁

周防山、四国山雪見、周防なだアシカト云ケダモノ岩ノ上江上リヲル

十日

一安■キノ御手洗、夜九ツ半時位出帆、ゆけと申処ニ而、夜明け夜五ツ■時分しもつい江着、海上二十五里

十一日 しもつい

一追風ニ而強船頭ハ出帆之儀申候得とも、役所方申ニ而滞船一四ツ前時分、廿五六間計ノ蒸氣船、此ミなとノ前半道位ノ処上リニ通船致バ、いら島と云一里半位ノ処ノわきの洲江不案内ニ而■かゝり、大炮ニ三度打候由、風強く候而不開候、夫ニ而も船不動、如此処ニ而、此方舟二■さう、蒸氣船江乗り候由承り候得とも何事も相不分候、追々御城下江飛脚参候由、一■■與ハ三百人位

十二日

イ國人
アシリカ人

一今日者昨日方も風強不宜、下追江滞船、○四ツ時分蘭人三人、暫此陸江上り、見物人多く候、尤宰領人四人位付居候、○金ハ百五十文、御案内を致せト申事ノ由

小糸

山家屋長兵衛江鯛の進上（原穴百）

十六目

一七ツ半明石大蔵谷立、西垂井大津屋宗三郎所小立、庭_{江松}

木作物有、此間舞子浜一ノ谷ノ路側厚盛墓有、茶屋そば名

物、此前異船通り江戸引乎、○ケラマツ、シ有、須磨和泉

屋治兵衛所小立、○兵庫昼休
所、此處_二而此_一前御

昼休、亭子畠山助右衛門方菓子衆に箱進上、此左右ノ畑井

多シ、湊川楠公墓左ノ方岡ノ杉山也、其下湊船多シ、右ノ

方イク田社
小立

川内や治兵衛所小立、辻井丸や男助所小立

西之宮
日入前着、菊浜塩進上

十七目

一七ツ半西之宮立、○白川、
川、イタはし、天ヶ崎小

町屋与市所小立、天ヶ崎^ニはし、左之方城下大黒はし、神

崎小立、さゝん茶、
神崎川船渡し、
十三川、十三村

昼休 ■ 大坂着

大坂着

十八目

山家屋長兵衛江鯛の進上

十六目

一七ツ半明石大蔵谷立、西垂井大津屋宗三郎所小立、庭_{江松}

木作物有、此間舞子浜一ノ谷ノ路側厚盛墓有、茶屋そば名

物、此前異船通り江戸引乎、○ケラマツ、シ有、須磨和泉

屋治兵衛所小立、○兵庫昼休
所、此處_二而此_一前御

昼休、亭子畠山助右衛門方菓子衆に箱進上、此左右ノ畑井

多シ、湊川楠公墓左ノ方岡ノ杉山也、其下湊船多シ、右ノ

方イク田社
小立

川内や治兵衛所小立、辻井丸や男助所小立

西之宮
日入前着、菊浜塩進上

十七目

一七ツ半西之宮立、○白川、
川、イタはし、天ヶ崎小

町屋与市所小立、天ヶ崎^ニはし、左之方城下大黒はし、神

崎小立、さゝん茶、
神崎川船渡し、
十三川、十三村

昼休 ■ 大坂着

大坂着

十八目

一大坂滞在、四橋辺見物

十九日

一同滞在、藤左衛門、同船^ニ而御城見物

廿日

一九ツ時分^星方川登り■

廿一日

一今焼七ツ時分 見着、直^ニ文珠所へ止り挑灯引立

草津姥の鉾ムチ名物

廿二日

一城七ツ半時分■
(原空百) 立、暮見小立、石色村小立、夏見^{梅之木}

や立、桜川酒有、田川小立、水口、鵜飼伝左衛門所昼休、

此処つたうおき物

松野小立、土山○坂之下着船、一十一^{左候所実ニ}リ余

廿三日

一坂之下七ツ時分立、左筆捨山関^(原空百) 小立、右小井いセ路

勢州龜山城下庄野昼休、杖ツキ■まん中富田、焼蛤名物桑

名、四季花着^{所宿}、名物

廿四日

一桑名六半立、川登り三リ之筈候所渴水^ニ而、一リ半位ノ処
方上陸、佐や本陣岩間権右衛門所小休

一玉子十二重之内一、みりん一、爰父子方進上、神守昼休、

猪飼猪三郎所、晚五時分、宮いセや伝左衛門所宿、尤上使

通り^ニ付、初^而此宿相付由、喜右衛門・喜悦夜咄候、呼趣

有、五人、熱田神主方菓子折進上、当所名物割干大根進上

十一月廿五日

一五ツ時宮立、昨夜雪ふる、此前も如斯之由、鳥井善左衛門
所昼休、当所名物そば、酒肴類進上、五ツ時分恩崎大津勘

左衛門所

廿六日

一全日恩崎挑灯引立

一藤川森川休左衛門所小休、黒龜進上^立

一宝蔵寺門前鈴木新助所小立、雉進上、七歳

一御油昼休、鈴木善四郎所至^ニみかん一受進上

一吉田中西与右衛門所宿

十一月廿廿七日^(マ)

一七ツ半時分、吉田立、荒井田代齊兵衛所昼休、酒ト取肴出

ル、しをから、宜御本陣疋田弥五助方進上、ハゼ魚進上二人多シ

一西洋布二、本陣江遣也、尤舞坂と改服二而参候

一荒井渡海、静成海上

一舞坂小立、仲左衛門所、暮時分、浜松伊東平左衛門所着、

雉七ツ進上

一今夜方甚五兵衛・次兵衛・直二、江戸立

一今晚歩行役面々前二而酒遣也

廿八日

一七ツ半立、天龍川二所船渡

一袋井太田八兵衛所昼休、ニシ三ツ進上

一掛川鉄屋次郎右衛門所小立、菖布取入日入、日坂(原空白)所

着、わらひもち名物

廿九日 冬日也

今七ツ時立、大井川渡水脚之辺迄、将左衛門良非、藤枝青

嶋治右衛門所昼休、小鯛十一進上、■ウ下谷石川忠左衛門

所小立、宝物見■、名物進上、あべ川渡、仲左衛門・伊十郎、

暮時分府中、平尾清三郎所着

十一月晦日

一七ツ半立、小吉田稻葉源右衛門所小立、名物才し梅干、辛

子二才し、酒・吸物出ス、興津手塚十左衛門所小立、名鯛

倉沢川嶋勘兵衛所小休、名物貝焼あわび、酒のミ有、富山

絶景、由井脇本陣平野四郎兵衛所小休、ミかん、青のり、

酒肴出ス、富士川船渡シ、■■■蒲原脇本陣草谷唯七所

小休、ミかん重一組、上付物下あわ小餅近名物也、暮過吉

原長谷川八郎兵衛所着、玉子・するめ進上、ゑん方ふじ正

面二見

(天部欄外)
「倉沢油木多シ、一升、百八文、三ツ又かチ有」

十二月一日

一今七ツ半吉原立、三嶋宿瀬口伝左衛門所昼休、松雲寺小休、

山草進上、箱様、山中正■助右衛門所小休亭主方酒肴色々進

上、寒さ過、重二重宗閑寺方、中山小休松■戸や源兵衛方進

上、銀子二両、備之者方進上之願候得共、挨拶迄ニテ不受、

今晚五ツ時分、箱根本陣川田寛右衛門所着、前富士湖水正

■面

十二月二日

一挑灯引立、御閑通行、湯本閑や郷右衛門所小休、丸盆一ツ
遊道具一、同人方進上、小田原本陣清水金左衛門所昼休、

七
目

いかの塩から、鮭のたゝキ一樽ツゝ進上、晩五ツ時分大磯

御本陣小島才三郎所着、名物浜石一駄進上、喜左衛門二男

参也

十二月三

一晩七ツ半大磯立、藤沢御本陣蒔田源右衛門所昼休、

長寿具進上、日入前程か谷御本陣刈

屋齊兵衛所着

十二月四日

一今曉八ツ時立、六郷川船渡シ、中野喜三左衛門大森迄出

迎、品川伴左衛門所朝五ツ時分着、九戸方出迎

上御屋敷西御門方罷出、七ツ半時分より着祝、客来有、自

分^二ハ半^一方引客之故、邸^二罷被居候、一汁^一三菜之料理出ス

五
目

一今朝四ツ時分登殿付、御機嫌

一八ツ後雪ふり

六目 五部位

十両かさ^ニ、何様相成、帳面差引^ニ不致候^而ハ不相成■
候へ共、役所^方申^ニ思召、其懷中全ノ中ト候間、其目出

ハ歩供末々^ニ至■被成下候^而可然候間、士■ハ五百足ツ、
付役ハ三百五十足ツ、道具方^并足輕・中間・内輪足輕・
小者ハ二百五十足ツ、^ニ而候

一 御城坊子

十二月十四日

十五日

一 登城、万事掛廻勤

十六日

一 浅草観音見物、吉原遊び、御方客居西筑右衛門、高崎喜兵衛、御方客居付殿肥田佐兵衛、庶役改色々兼■^立山郷之丞同伴、此方供新左衛門・利右衛門・要吉・嘉吉・大七^ニハ膳江酒飯出、信濃や善兵衛参候共、敷内^ニ而■尾張や^江参、御トモ人箸代二十二、帰り付鳥歌ひ也

十七日

十八日

一 六ツ半時分方登城、御奉書御渡シ拝領物^(原空目) 下り掛御礼廻り

十九日

一 今朝五ツ時分、御近親様御三家田安様^江御礼廻り
一 七ツ後方、増上寺喫宿へ步行^ニ而参る

廿日

一 五ツ時分廻勤■上野明王院^ニ而昼休、酒飯等出ル

廿一日

一 御わし拝領致候

廿二日

一 四ツ前御広敷^江罷出、昨日之御礼、直^ニ廿三日下り^ニ而、
旧^ニ而野羽織高崎・一猪俣同道^ニ而供、大円寺参詣■^江参^ニ候^ニハ上下着直也、上様御仏前、上先祖仏前迄参詣、又支度替^ニ而、泉岳寺封土墓所、同木像、目黒の不動参り、渋谷御屋敷御座内御庭等拝見致帰り候、相模橋之尾張や茶や江入、うさぎ酒飯出ル、四ツ前帰り

廿三日

御二方様方

一 拝領物

廿四日

一 六半時分方中野喜三左衛門・次郎兵衛同道^{ニ而}、すかも野

木屋大井、瀧水川モミぢ、飛鳥山、道觀山夫方奈原参ル、

夜四ツ前九ツ後宿駕コ^{ニ而}帰ル、弥一郎・弥東次・伊十郎

撰之助

一 画 一箱之物

右、一貞方

廿五日

一 夜呼候喜三左衛門・仁兵衛参ル

廿六日

一 御機嫌伺トシテ上ル

一 高輪方拝領物致ス

廿七日

一 五ツ^{四ツ}半前御屋敷出立、つまや^{ニ而}離盃十人余、樋屋敷暫

休、筑右衛門・喜兵衛・伊右衛門参、酒一通り、七半過川

崎着、所之三隠引三人参ル

廿八日

一 ■挑灯引立、横浜異人館見物■、追々紫華之向吉原も立、

茶屋^{ニ而}昼飯五ツ時分金沢^{江着}、

(原空白)

前^ニ入、海陸

方章吉三浜引一人■

十二月廿九日

一日出前引寺ノ上山ノ上ハ京之談有、鎌倉^江■参詣、鶴岡八

幡宝物拝見■、同所

(原空白)

休、元之嶋社段^ニ有窟之辨天前

迄参詣六少過藤沢着

晦日 少々雨

一 藤沢六半過立、大磯昼体

(休 原空白)

所小磯梅沢、小田原

(原空白)

着、喜右衛門宿^{江通}ニ参り

正月元日 夜雨

一 七ツ半過立

箱根昼休

一 三寫樋口休左衛門所、六ツ少過着、元日祝ひ

二日

右所

一 挑灯引立、吉原昼体、

(休)

酒肴等出ル、後方追々塩ぶぐ出ル、

暮蒲原草谷唯七 所着

脇本陣

正月三日

一挑灯引右所立、由井脇本陣平野四郎兵衛所小休、一此辺田本浦、倉沢川島勘兵衛所小休、此所ふし絶景、あわひ二ツ諸士方進上、清見寺^江見物トシテ参候、江尻寺尾貞太郎所昼休、小吉田今七ツ半過府中本陣平尾清三郎所着、家内親子出ル

四日

一同刻立、薦一休貫、宇都宿^ニテ藤枝本陣吉嶋治右衛門所昼休、かまぼこ進上

暮金や着

五日

一同刻立小夜、中山小和泉や^江小休、名物アメノ餅、七ツ半過、見付神谷三浦与右衛門所着

正月五日^六 晴

一挑灯引立 天龍川船渡シ

一氣賀本陣中村與太夫所昼休

一氣賀御番所通り味方京三^{ミカニチ}り四方杜松・小松多シ

一三ヶ日本陣小池八右衛門所日入時分着

七日

一同刻立

八日

一■同刻立 吉田海道

右ノ山ノ上^ニふし見セ、ふし見のあても此所云由、御油右豊川道八^リ半位之由、赤坂昼休^(原空白) 所藤川^(原空白) 小休、

れいし、雲母石進上、当所近ざいとちの木をつぶさより生スル由、れいしノねこ、雲母石付居、日入前岡崎^(原空白)

所着、後ノカベ公家方より有、着^ニ付祝ひ

九日

一同刻立、矢ハキノ橋二百八間船渡、大浜小休、そば、酒肴

出ル、ちりう^(原空白) 所ヲオケハザマ、左^ニハカ、右^ニヨロ

イ様ノ松有、右松、鳴海小休、日入過、富山城や吉左衛門

所着、夜 歩行^ニ出、けい者回、十七

雪有

一同所同刻立、□り佐屋昼休、桑名大鐘時分着福嶋や作左衛門所着

一挑灯引立、四日市
(原空自)
 所昼休、七ツ半
カミベ (原空自)
 神戸 所着

一同刻立、津昼休、暮松坂米屋（原宪百）所着

一同刻立、小畑（原空目） 所昼休、外宮參詣、七ツ後山田（原空目）
 着、備前屋江 おんと見物、（主吉） ■ ■

十四日 夜半方雨

一五ツ時分立、内宮參詣、二見拝見ノ筈候得とも雨天ニ付延引、小畑（原空白） 休兵衛所昼休、夜五■時分松坂米屋（原空白）

所着

十五目

一同刻立、**丸**や定右衛門所昼**丸**、七ツ半過神
戸伊賀吉兵衛所着

十六日 九ツ時分^ち雨ふり

一同刻立、吉野山ツヤヤをまんこもち名物、昼休いせぢ
左ヤ、名張小野ヤ彦兵衛所着 (原全貞)

十七日

一同刻立、おふしや新七処小休、三本松小休、山廻昼休、灰
原小休、栗ヤ糸三郎所、日入前はつせ参詣、夫方（原左主目）着

十八目

一七ツ半時立、せいまつ ■ ■ 桜井中嶋喜左衛門所小休、茶屋拵、多
武峯参詣、三輪昼休、武田屋甚七所、三輪参詣、宝物保呂
江ひら熊沢取海奉調之由、暮、奈良サぬキ弥兵衛所着、新
やへ参る、浜老十八

十九目

廿日 一日出立、なら着、社三笠山江上ル、蜚池大和や十兵衛所着

廿日

一日出立、宇治蒔や一郎右衛門所昼休、北郷・有川参候、平等院万福寺見物、大仏前富士海道小川直兵衛所小休、日入

京都着、御役々扱六人位賄受

廿一日

滞京

一五ツ時分方見物、六角堂・二条御城・小野天満宮・金閣寺

見物、夫々雪ふり^{ニ而}治原炭や^江参る、座ノ壮有、同烈四人、輪チガイ屋花窓十八

廿二日

一滞京四時分方同所金観物、地恩院其外所々見物、田山^{原吉三}

へ帰り^ニ上鳥と嶋原^江参ル

廿三日

一五ツ過立、嵐山見物、雪月花^{ニ而}昼飯、横田・北郷同伴、

残^{ニ而者}外之処見物不調、日入前、伏見文珠所着

廿四日

一五ツ前時分立、川下り^{ニ而}日入大坂着、夜兩人酒会

廿五日

一天満天神通り見聞参後、住吉や^江参、兩人道引、げい者五

ツ十九歳、翌日四ツ過帰候、昼[■]時分方雨

廿六日

一四ツ時分住吉屋方帰り、吹田京見物、覚蔵案内、夜幽長呼也

廿七日

一四ツ時分天王寺辺見物、伊左衛門同伴、夜伴多呼也

廿八日

一四ツ後方舟^{ニ而}住吉参詣、永井同伴、十六やノ松見物、帰り掛夜五ツ後住吉や^江参り、翌朝帰り、三ヶ月玉江橋方見

ゆ

正月廿九日

一九ツ時分、大坂川下り、松平遠江守禄四万石、尼ヶ崎より

迄^{ニ而}、煙草屋宗兵衛所昼休、娘かめ申ノとし、西之宮小^{給仕}

畑弥兵衛所着、暮前也、一言故女不出^見

正月晦日

一日出時分立、生田森楠公墓昼休、兵庫増屋長左衛門所女給仕、大蔵谷石井五郎兵衛所着、娘いく十五歳

二月一日

一挑灯引立、手植の松、○かこの松、鶴の巢ごもりの松、○相生の松、尾上様都応しの[■]片雲の松、○高砂之[■]相生之

松、此処ノ町■つり屋伊七郎所昼休、石之宝殿参詣、姫路脇本陣井上笑兵衛所着、夜五ツ時分、娘てる十七歳

二月二日

一日出前立、正條昼休、伊セ市兵衛所屏風之□□く、馬場藤右衛門所小休、アヲイ一株貰受、大鐘時分室薩摩や治五郎所着、役々酒肴、ゲイ者二人

二月三日

一七ツ後、室出船、五里位沖大タブと申処塩作り、夜明出帆

二月四日

一夜晩大タブ出帆、八時分夕渡津着、直^{船上リニ而}麓町備前屋剛八処着、ゲイ者三人参り、大和屋小かよ廿歳参り^{泊り迄百五十丁}

二月五日

一今朝金毘羅参詣、夫方八ツ過、多度津町タクミヤ雅吉早瀬川^江参、酒飯給る、暮前迄風様見合^{ニ而}立、娘小虎^{トラ}十九歳、三弦引タクミヤ千よ松廿三暫咄シ

二月六日

一暁夕度津出帆、夜四ツ時分宮嶋着、海上五十里

七日 雨

一今四ツ時分、中屋^江参り、ケイ者六人呼内、きみ江十六、一宿

八日 晴

一今朝、明神参詣、五半時分出帆
一上之関^江七ツ時分着、夜上陸、酒吞参り、ゲイコ一人参候、ひなぢ

九日 海上十六り

一今明ヶ前、同所出帆、七ツ過下之関着、いなり町大坂や^江参、加茂川十七歳、翌朝雨、夜半^{とこ}方雨、滞船

十日

一四ツ時分方うなきや^江参候、後又大坂や^江参、七ツ過方舞稽古見■、此処^ニ一宿、翌朝帰り

十一日 曇り

一八ツ時分下関出船、七ツ時分大裏飯や着

十二日

一挑灯引立、黒崎薩摩や仁右衛門所昼休、酒肴出ル、七ツ半過木や之瀬^(原空巨)所着

十三日

一 挑灯引立、飯塚宮崎仁右衛門所昼休、山家（原告目） 所着

一 挑灯引立、才府天神参詣、門前泉や江立■寄、酒飯食ム、
ケイ者二人呼出ル、かすり取入、二田■郎わたやおみよ
所小立、ミそ伝法、松崎町柳川や仲八着

十五日

一 挑灯引立、府中仮屋昼休、瀬高仮屋着、娘つり十三つる

十六日

一同刻立南之関、昼休山鹿早川、むすめ通嫁也、廿一歳

十七日

一（破損） 一 植木方尾方藤七郎所昼休、暮前川尻松田又右衛
門所着、うなぎ有、■十八日同刻立、小川昼休丸や治平所、
七ツ半過八代一文字や（原告目） 着、児六人給仕

十九日 雨天

一同刻立、日なくへ松村伝左衛門所昼休、柳貴也、貝化石

貴

景行天皇 ■■■

芦北の野坂の浦ノ空淡く

いもせそなへて幾せ雨ぬらん

赤松峠立テ、佐敷峠立テ佐敷

本陣薩摩ヤ善吉所暮着、春光一半遇他州処ニ柳花炉鸛浮宿
細雨客不眠家花事終宵和両到心頭

廿日

一同刻立、（原告目） 貫峠野立、水俣松本良助所昼休、笹原野立テ、

手前川肥薩境木有、米津迄一リ三合、日入前出水仮家着、
地頭代着・あわひ・焼酎貴、役人方両種貴

廿一日

一日出時分立、野田地頭仮屋、昼休七ツ半時分阿久根町川南

七郎左衛門所着、女給仕二人、西方仮屋昼休七ツ時分向田

と町

廿二日

一五ツ時分立、西方仮屋昼休、七ツ時分向田町客飯屋 番松本

與兵衛 油屋昼休

廿三日 雨

一同刻立、油屋昼休、七ツ時分苗代川焼物所見物、い十院着

関のそふかに信があらハ、立てた柱ニ花かさす

関のしハ真実■に雨のふらんに、かさくれた、

——ハおいしやさんさ増^よ■内の、さいふの脈を取^而、——と

さどの奉行さんハ、穴をほらこして金を取^而、

大裏白クミ下の関硯書て流ハかんりゆふ嶋

髪のもつれハまくらのわたよ、心もつれハぬしのわた

おまへの百までわしや九十九まで、共白毛のはへるまで

松とゆふ——い木へん^ニ公よきミを、

はなれて木かのこる

○よさこひの音上り。板坂^{ニ而}

一よくのあさ、まに錢五百のながのらんハのせて見よもし、

とやのつた、其時わたしかおとうにふへふかす

いよさのさのく^くやつとこせ

一なひく^くく^くなになひ、私の■すそに毛がなひ、

あにも毛なひのも毛づんべくぼとよひのがかわらけぢや

よさこひ

一ならのかすがの猿沢池に、影をうつすハ三笠山

一さる沢の池にうつりし三笠の山も、空かくもれハかげさ
ん

一ならの都の十三かね鹿を、ころしていしこづミ

宮^{ニ而}よさこひ

一茶屋の娘に茶を立てさせて、茶屋^ニのませて茶に去りたし

○いよさ

一わかい娘がかの子を出けりや、遠ひとこから目にかたる咲

きしもや見し^ニ、其時ハ皆さんよだれをそれ流す

一高ひ山から谷そこ見れハ、瓜や茄の花さかり、若もや咲た

其時ハ、皆さん瓢たん持て夫たのむ

一坊さん山道やふれた衣、住^{けど漏れと}■^ニ木^ニかゝる着もややれ

た其時ハ、皆さん法くわんそれ頼む

金沢八景おつへふし

一金沢の八景ハ瀬戸^ニうつりし秋の月、小泉の夜の雨つ川暮

雪や御てんかた田に残りし薩摩のそて、野しまの夕げしき、

す崎せいらん塩けむり、しやう明寺のざん照にホぼくあ

り、青葉をみちやつやふかし、梅に桜に一松、出船入船夕

日にかゝやく帰帆まち

いよさ

一世間男ニ添時、寒かたひらニ土用ぬの子、まけて帰れた其時ハ、わたしをびちやくくたゝかんす梅かひの手水鉢、わたしをたゝひておかぬがおる者か

古言

一 いやちやくハ女のくせに、実の心ハしとござん

一 娘十七八ちやしほやのけむり立も青ハかとしほらしや

一 娘嶋田ニ蝶たるとまり、とまるはずちやよ花ちやもの

一 西もよさこひ、東もよさこひ、中もよさこひミゆきとひ

一 芭豆ノ実ノ皮ヲ粉ニしてのますれハ、屁をもらし物之由、

実ハ水を下し、皮ハ氣を下す物と喜悅咄

一 荊苧ノに汁をひやし花瓶の中ニ入、松の枝をそし置ハ、来

春迄ハ不指ものと喜悅也

一 白木槿花痢病下シ止

右花落なるを捨置用る時、火の上ニ而少シイリ、ヤゲンニ

テ、ヤゲンニテくれも板ニ、粉トナシ細痢病■の渴の止

マラザルニハ、先渴薬ヲ用、穢物ヲ取置

一 痢病下シ止メ 秘法

一 白木槿花

但、落花なるを取、火の上ニ■置、用時ヤゲンニ而粉トナシ一留位

■一先ツ渴薬ヲ用ひ、穢物を取、只今と思時、常の如きミ、そのに汁を調べ、茶碗一ツ花右之掛めニ而入レ、朝昼晩三度のますべし、喜悅咄、四月十五日

一 ■
バルサン油

右ハモカシノ木の油也ト喜悅咄シ、四月温泉中咄シ

一 三界■明はんニすをさせハ雨ニ落すと箭七郎・甚右衛門にて、色葛黒なるといふニ■■葛ニ正月八日

ひとすしに恋しと

おすもふ君なれと

きみのこゝろを

きかまほしそよ

龍岡君ニ 京師の遣ける歌

十二月十四日

(半丁空白)

泰蒙

聖君命荷重出城門遙志

東武地征興水上臻朋友

送吾別勸盃離情醇

小間在此処告安旅袖分

悠々大官路人馬見往還

今僅纔誰人衆

(半丁空白)

新詠

一関のそふかハ別のなミたよ

出船あとしてハ後ゆひ

一おこし炭船のこよ川登り

風ニまかせてはしらせる

安政六 紳(日帳)〈安政六年(一八五九)〉(都城島津家史料 B 01230) 写真

土器 土 安六六末ヨリ

一 赤土ハ

一 赤土ハ

一 赤土ハ

一 赤土ハ

一 赤土ハ

右の土は赤土ハ

土器

右の土は赤土ハ

右の土は赤土ハ

右の土は赤土ハ

右の土は赤土ハ

右の土は赤土ハ

右の土は赤土ハ

上掛藥試

一、上藥石

一、踏

一、孝經麻倉岩

一、○

一、火紋石

一、○

一、池、増、植、砂

一、辰 見、金、大、神、宮、石

一、八 虎、山、軒、河、原、石

一、同 ○

一、と 宮、原、内、黄、泥、石

右、宮、原、内、黄、泥、石、赤、土、

一、ち 小、松、原

一、り 赤、土、田、土

赤、土、田、土、赤、土、田、土、赤、土、田、土、

一、辰 赤、土、田、土

一、辰 赤、土、田、土

一、辰 赤、土、田、土

一金

四木

七上

二金

五木

八

三火

六

菊養法

一金競赤子

吹上甲子?

一
去
隔
山
之
短

石二月十二日發

一 卷 八 十 二 冊

一
狩
と
廻

金天

く、暗く夜ふとるん

二月二十一日

一、此乃取用易，而示明之

一帯三南北

一雨

一、（一）
二、（二）
三、（三）
四、（四）
五、（五）
六、（六）
七、（七）
八、（八）
九、（九）
十、（十）

一 天一

下下下下

地火明夷 一二三 爻 地雷復
 新云地火見事ナクニ復明スノ夷ニ
 日本ノ歎ニハアラハ 復以卦以ウニ春ニ雷ノ後ニ
 ナリ復カニナリサトトハニ里近ニナリケケ足
 ルト云ニナリ歟トナルベニ因ナリ

室五十二月ヨリ

時、救、占、覺。

獸

明夷之復

地火明夷
一一二
地雷復

新云地大穴見事方如王孫方明夷人夫三

日本ノ
大ニテハアラバ
父トヲ以テ
母トヲ以テ

ナリ 復ハカニナリサレハトバ
子皇遊ニ子里カケル

ルト云モノナハ廿^ニ載トラサルベ^ニ田本ノ然リ

地天卦

二二二 初九變

二二二 疾風 姤

補草 義草

断云 地ハ震トス大ナリトス 天ハ健トス 固トス

花ノ大ク盛ニ多キモノナリ 飛鳥ニシテ 回ニテカラ

ノモノ 日車ニナリトス 元エトモ 初メ盛ナレバ

年々 瘡根ヨリ 生スルモノト月ニテ 花菊ト云

曰木ニカカリ

雷風恒ニ二二二 此ニ變ニ二二二 澤風大過

新ニ云 雷大ナルモノ又 初モノ卦ニナリ 上ハシカ

ノモノ 震ハ風ニシテ 風カレテ 初モノ 震ニシテ

器物

雷水解

新中

アリ変外

ヲトリテある

2

市部

頭尾

又五ノノノノ

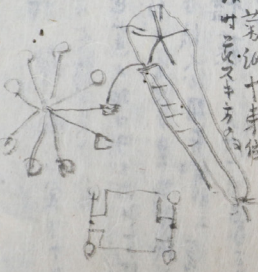
二三年に大なる夏つゆ

一モナノバトナノ木ニ由テ成ル

一 棚はのりまぐろ並葉部

鹿茸五本分七世
小菊次十束德

餘時又方



小
子
福
如
天
長

卷六十一

西風下之
定之
從通之
其去何

七
子
子
子
子
子
子
子

一
早
三
五
十
文

六月十七日申る迄に

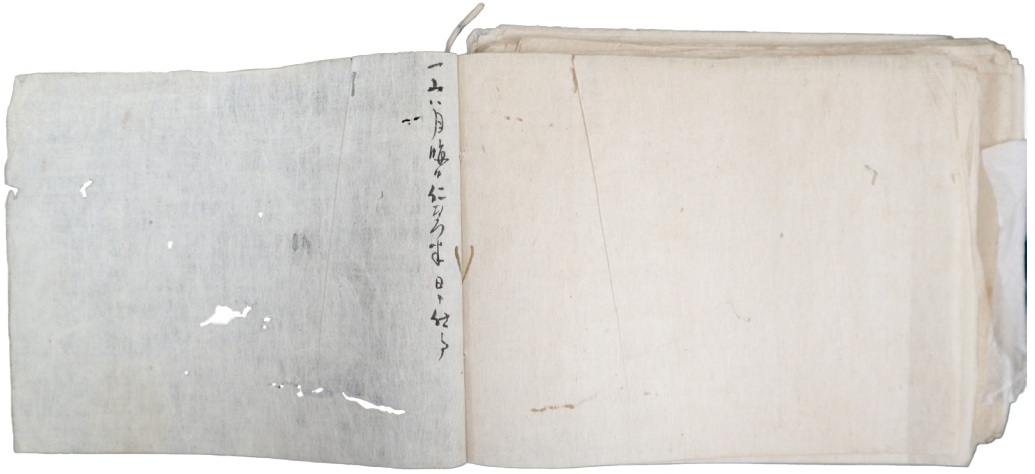
父子也

世
白
上
下

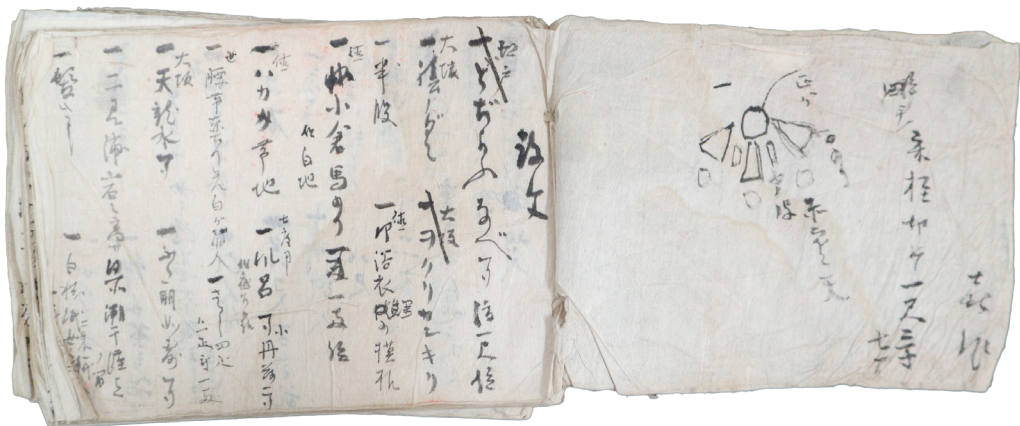
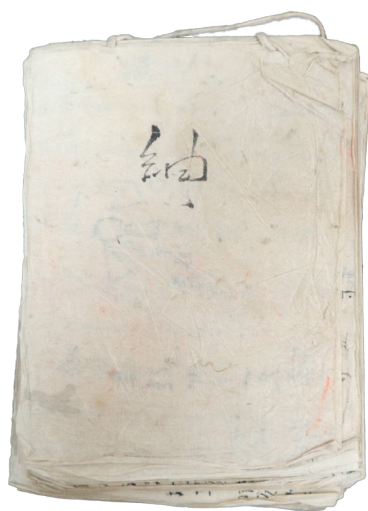
一、一寸
一、二寸
一、三寸
一、四寸
一、五寸
一、六寸
一、七寸
一、八寸
一、九寸
一、一尺

[illegible]





紳(日帳) 〔安政六年(一八五九)十月〕 (都城島津家史料 D 01236) 写真



一
湯
中
花

一
か
ふ
三
針

十
4
二
三

一錦子茶之四

一、（イ） 用如：清王茶碗
（大）

一 派系
一 以人付

一
ゴ
石

父ハコ又古金也

一

共
4
3
人

一山まゝ
敷
ハ
尺

卷二

重刊工白水丁

一斗と一石

永明之香玉

一

一 廣子二有包一草書

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

登口說

一 旅のたゝ観音堂子午

觀音伏くわんおんふく 好こう 之し 二に 叩くわう 手て

とて立別

袖小方露巾拂以

大東
乃
松
原
安
乃
之

新刊
八
中
情
宗
之
考

一 新地高き一歩海で油

七件

一 沖の側まてとや申す

見寄つれて別々旅衣
神ののほゆるみ

一 舟のともつなり

船子あかておれひけに
舟やまゝもこゝろ末

一 又もろくろも色あはれ

手ぬぐもろくろも三重城
致をるもけしきよそん

一 伊平を返立ばり

すて。道のしるしん

もくせい七つぼち

なぐやぐ

一 ものけしきも疎

ま他もぬきもあはれ

て。風心ゆきにくる

甲斐つや。みんま

は

山川や日はけあ

はくし

一 まても旅衣のぼろ

あまのさあたるこころ

まのふくまもさあ

しもさやく九月ま

まに

一 やぐてはあつたれては

のやくさあて未だ

天竺のわ

一 りやや西伝やまを

下。あまのふくま

り金もふくにてま

一 各はうがあつた

らるるふくま

あはれ旅のま

あはれ

わま
こ
み
を

ま
は
あ
の
改
め
す
ん
と

又
ソ
ハ
ミ
ミ
ノ
セ
ス
ホ
リ
ケ
ダ

KB
P
y
y
y

ルヤシモ子母の方

佐々木美晴七郎

丁巳清海

空

一 昨 日 午 後 二 時 分 鐘

治也

の
ね
を
ひ
き
か
へ
し

94

一
 乃のしり
 するて

伊平屋
立皮

北より
新井に。

とて
おと
と

一、
可
也
之
所
以
成
之
并

の山嶽しあはれ
といふ

神をてゐる
人々

逆に。あてなるみえく

新子川

結

右山崎 六十日十八日

とるに未しす

五斗五斗

一、
（上）京
横井

臺休
初の木の
かしこ
く

そてしちるふそてしちるふ

美入

三ノ下

有りて大日
 其の而天
 之聖や古くは

木造の門

一、日本

る方
アブラヤウキトナ
うしん
あそ
ち
あそ
あそ

門
太
小
受

三本一斗

一寸佳三万

子
乙
子
子
子

廿下
學八
諸小
家
公

系年之所

國地蔵山とあり

以名田路成，帝曰

懷柔川石橋古渡

小工上子道心中長八

木一里文

海

方省川居濟南

子路

三のちりう一

馬汁之宿願也

重刊
卷一

左田之江はふた

茶名抄り

廿二

あけりてをえり

先右十廿下を離して

土邊庄拓成り沖邊に社

魚
 石
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

江戸参府に参上

五

真乃可也

一里徑入口

出水暖乎新白

五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

西の永島方川庄なり

時子天竺

卷之四

香瓦抄子 活字

入奇伍梁ミ下

山中無事日長

五草肥より

江口

一、子、十、三、

卷之十

以竹然不菓子極干

水松系の
ひたしを
酒

立雲可也

[illegible]

[illegible]

竹野八代志七ノ中
一 笹山 大正十 可田食ノ水ノ水ニ
菊花拈能ノ水ノ水ニ東町
小川町中ノ水ノ水
休在ノ水ノ水ノ水ノ水ノ水
第一ノ水ノ水ノ水ノ水ノ水
川江村ノ水ノ水ノ水ノ水ノ水
清水ノ水ノ水ノ水ノ水ノ水
上ノ水ノ水ノ水ノ水ノ水
高里ノ水ノ水ノ水ノ水ノ水
川江ノ水ノ水ノ水ノ水ノ水

[illegible]

一 寺山 庵三
 一 光行寺 小 之庵 小 以 衆 小 之 挑灯
 川 古 江 ユ 町 ヤ 中 サ 寺 ノ 新 ノ 山 立
 川 方 之 徑 ノ 菊 ノ 岡 町 屋 休 命
 屋 基 之 於 不 是 ウ 田 中
 若 大 法 師 斗 哲 之 井 打 抗
 肥 境 不 於 ナ 十 一 丁 三 丁
 狹 原 驛 小 之 津 高 町 石
 町 ノ 徑 小 之 山 之 之
 町 ノ 徑 小 之 山 之 之
 水 車 之 不 能 ハ 力 ハ 能 ハ 茶 屋

一羽大ツカヤウキヨク一丈一丈

中少正小立愛護系上

方東山詩印所得

小立下馬羅方方中言曰羅山

石山下齋中長崎屋末春

一也欲持此

二、右町

二二三

不
五
月
日
月

卷之六

卷之六

山家

廿九

十三年

世小立
相
灯
引
天
道

湖上二水立恆象雲

美魚が不登口小武

田廿道榮庭小立口友尾

十七日 晚 三 藥本九甲 炮矢

甲子師古能者

川古
白公
溪
下
川
小
倉
宅
後

此中每種外各一石

木下

中村深平不名

訓
正
信

一 柳河川 畫本 卷之三 石松

いちふし本定をつふふと上京

天端子從小立

仁孝

十一月

中書時方呈稿

下ノミヤギノ

二六

卷之六

卷之四

月夜

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

卷之五

水口寺日記

卷之四

松崎解鏡著下國繪本古書

卷之六

入
灰
水
之
中
以
洗
之

黃溪風雨

變三千
宋

右

燕京
正水角り外由緒のいふも

立 甲子

五

十六

一、（附）
 一、（附）
 二、（附）
 三、（附）
 四、（附）
 五、（附）
 六、（附）
 七、（附）
 八、（附）
 九、（附）
 十、（附）

不_レ以_レ之_レ方_レは_レず

休亭

子皇山脚古山草子一而一頁

いたる、
畑井、
深川、
箱公、
共皇元

石ノ井イタ田社
小三

雨之云
水や 竹の房 小ま
中村 好や 男 小
日大 好ま 菊 小

十七

上り金にふまゝの川

天姥山

黒く 砂 立 茶 大

川
叔
三
十三
川
十三
利

正色休二

本坡

文板房

十

一六改字在四條口

十九、

一日浮在菱花江中戲見

一、
二、
三、
四、
五、

廿七

一
文
書
卷
五

且
為
書
三
文
原

江戸
市
灯
川
魚

草藥考 銷山千金

卷之七

祐之

小三石村小三夏己十二

新川沼
田川
小三
水
口

新調第一不登作

古山場子
若松
一
雲
不
名

サ
三
十一
分

大筆換

十三
右小弁

唐郎玄休

品木久
四季
不
冬
夏
秋
春

卷之六

小湯水三
一
半仁、
茶ふ
下二

足少陰と小腸系、海溝

三ノ下ノ所ニテ

諸君中を我々が白く見せしめ

彼等が相提携し居れば我々

うき世に居るが如くは

廿二日

一 飯後

廿三

一 二時半四分の中絶を告げ

何處へ行くか云々を大井

氏より三三三 子守山 道程

を車に乗せ我々が乗るが如く

三三三 山下の所へ行くが如く

一 画 一 画 一 画

廿五日

一 本時より三時半迄

一 巾着屋の所へ

一 高輪から往ねば

廿六日

一 三時半より四時半迄

一 龍谷の人を招き居るが如く

一 高輪から往ねば

一 三時半より四時半迄

一 三時半より四時半迄

廿八日

一 三時半より四時半迄

一 三時半より四時半迄

三 飯後

三 飯後

十二日 廿九

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

一 日方前川より上へ山へ上る

五月廿三日
小

又

一 排灯川右三由升級中陣中野

正寄系小休 一 谷河 高知系小

小休 正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

五月廿三日
小

又

一 排灯川右三由升級中陣中野

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

正寄系小休 一 谷河 高知系小

一、別立條目休養板

小休
進
息
休
原
小
休
雲
力
三

十

三

一十一年立井中記

小休茶室 武庫余法三

五休部四石基七下之陽東漢金銘

保昌のひふをばるるに由る

なまのくさ 兵部省 新也

卷之十

十九

[illegible]

大和十三年

女也

一日五三
宣治教人
不
宣

此書乃平家院家藏書也

氣主陽通 少則氣不足 故曰

桑子見川公于二人後

十
二

一、市京
一、市京

不似此師天海寺金剛寺

月如天
雲
之
清
泉
所

中山手記卷四 人物抄

卷八

廿二日

一、清景四時分月不盡心記也

與院士外下之足地田山

サニ

五五五山月夜

李公一

夢

一子孫家世立以子孫人方後

袁叔子酒

狀可

一天返天补、返り、月々、糸、縁、任、者

中系五人道行け
又エツ十九日

七

一 羅以 值若 爲 醉 樂

...

丁巳年

日方うい信 天

十八

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

月 律 三 十 一 日 取 月 紀

陽 月 律 三 十 一 日 取 月 紀

金 日 紀 三 十 一 日

正 月 廿 九 日

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

陽 月 律 三 十 一 日 取 月 紀

金 日 紀 三 十 一 日

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

正 月 廿 九 日

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

陽 月 律 三 十 一 日 取 月 紀

金 日 紀 三 十 一 日

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

陽 月 律 三 十 一 日 取 月 紀

金 日 紀 三 十 一 日

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

陽 月 律 三 十 一 日 取 月 紀

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

陽 月 律 三 十 一 日 取 月 紀

金 日 紀 三 十 一 日

正 月 廿 九 日

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

陽 月 律 三 十 一 日 取 月 紀

金 日 紀 三 十 一 日

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

陽 月 律 三 十 一 日 取 月 紀

金 日 紀 三 十 一 日

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

陽 月 律 三 十 一 日 取 月 紀

金 日 紀 三 十 一 日

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

陽 月 律 三 十 一 日 取 月 紀

金 日 紀 三 十 一 日

一 中 小 舟 行 者 集 法 界

たけ
油とすしつり

関谷の寺町大坂や糸川

十七日 置外雨農中雨淨

又

生十八年十一月

十月

一、天下同為一氣

伍
也
五

410

一、則以三子爲落之仁

小名沐名

要之

十

官清仁厚

一
火
三
何
地
上
哥

不美

[illegible][illegible]

何物や仲は美

tefe

夜山隱居

游五長庚
美如

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

卷休山麻里川

二

1

十

子之居主

[illegible]

卷之六

— 3 —

十
雨
天

以計之曰乃之松竹何意也

休
柳
雙
人
負
化
石
芝

三才圖會

朱
和
公
子
作
五
子
作

不傳庭中事

春光一幸
廿日
細雨不眠
家花事
三月

一曰刻至
和雨到心頭
無味

水復和衣而臥

人不知胆薩境木乃米也

一り三合日入か出水段下

吳地江代著

明倫彙編

市仁

一、
野田

卷之五

川もせりふさ
生市時を

青林山房

サ
一
百

一、時、西、方、段、不、平、

中書省白田縣屋中書松本

興亡之
通名

廿二

一曰計主油至厚味

李樹
子
陸
之

関の北より南へありて

柱之於木

國の—は實數と虚のふたつ

かきくけこ

一、おやさんごきんごの

100

三ノノ

卷之五

大草白り三下の窓、破れて流、

2. 1000

花のちりきり
 りきりきり

あまのふりやう

其白毛のうろすて

取^レボ^レボ^レホ^レン^ニホ^レキ^ニヤ

ゝゝゝゝゝゝ

○さるのきり
程

まゝの
けいふ
まゝに
上戸の
か

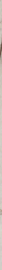
のせておいて

Wm. L. Garrison

之

Don't forget me

まゝ、ちいねのまゝ



100

あふ毛が
なひ
ひあふ毛な

のともづなごころみ

か
も
す
ぢ
や

卷之六

あゝの
わさる
の橋は
泥こ

新刊

さる
上
の也
り
る
の

卷之六

もろくろのつむぎさん

るゝの印の子と子と

あそびていづる

2

喜三子

一景の娘ニ茶を乞ふ

て茶屋のやうな茶を

10

一 月六日 娘が
あのみとあや

古
月
心
月
心

第...
...

ふんとふんと

一、ふい山りそろとるれにけや

あのをけり 若とやぞ

[illegible]

またつむ

堀えん山に 居ぬれゝ衣作
けどゆきと

東海集卷之四

中江氏の法

三三三三

上堂以八景書之

金はめ小景は深きなり

舟の尾小糸の末の雨川

卷之五

さけり 落しのこしとて
障子の夕やけとて
廿二日 夜半より五や
明きのうん照ふ木が
りも葉とみちやや
ゆり 柳の枝とて
おね入ぬふつや
ゆね

いふ

せう 胃に海狗油をいれ

大用ゆのさけり

まじりたるをばちや

大つんとぬいふ

もつとぬいてぬい

あつち

あつちやいふ

一 花をいふ

一 花をいふ
さきもやちや
二 花をいふ
さきもやちや
三 花をいふ
さきもやちや

一 花をいふ

すけい

ハ

一 花をいふ

ま

一 白木槿花

右も

上

の

ヲ

一 白木槿花

一 花をいふ

一 花をいふ

一 花をいふ





【史料解説】

【史料解説】

今回は、①「安政六 紳（安政六年（一八五九）」と
②「紳（安政六年（一八五九）十月）」の二冊分を刊行
する。まず①からみていこう。

本史料について形態からみると、縦一七・一cm、横
一三・一cmの帳簿形式となっており、小横帳（横半帳）
と呼ばれるものである。通常の横帳と比較すると 小型
で、そのため文字も小さく記されている。携帯可能な大
きさであり、携帯しながら、随時記したものであるう。

表紙には「安政六 紳」と記され、また鍵と思われる
スケッチがある。安政六年に記録したものと思われ、途
中、「万延」に改元されたことが、三月十九日付けで記
されている。

表紙を開いてみると、途中、白紙の部分が数十丁みら
れる。内容を見ると、食物のそれぞれの保存方法、土器
に使用する土の産地、配合の方法、その釉薬等について
も記されている。また、途中、自らが詠んだ和歌を収め、
添削も行っている。このほか占に関する覚書、役所で注
文した品とその支払い状況、「役所蔵石箱格護金」の額

も記録しており、雑記帳的役割を担った帳簿であるとい
えよう。いわば、これは日記ではなく、記した人物が自
ら教養の向上、業務のために記した覚書といえようか。

②についてみていこう。史料についてまず形態からみ
ると、縦一七・六cm、横一三・〇cmの帳簿形式となってお
り、小横帳（横半帳）と呼ばれるものである。①と同じく、
通常の横帳と比較すると小型で、そのため文字も小さく
記されている。これも携帯しながら、随時記していった
ものであるう。

表紙には「紳」とのみ記されている。内容を見ると、
初めに江戸や大坂に注文した品々が記され、江戸へは「ど
じょう鍋」、大坂へは「帯地」や「髪さし」、「ケン玉」「扇子」
など様々である。そのあと「登口説」が書き留められて
おり、続いて江戸城登城に係る往復の道中日記となつて
いる。安政六年末十月十九日の鹿児島城登城から始まり、
復路である翌年二月二十三日の「苗代川焼物見物、伊集
院着」までが記されている。

そのあとには「よさこひ」、そして漢詩と自作の和歌
が書き留められて、本史料の記述が閉じられている。

本史料において、江戸城登城のための往復道中日記は、

全四十七丁の内三十丁と、その六割以上を費やしている。こうしたことから考えると、本史料は「道中日記」として位置付けて差し支えないだろう。

本史料で注目されるのは、江戸へ向かう道中が詳細に記されており、その日数や街道の様子を具体的に知ることができることである。この記録によると、安政六年十月十九日に鹿児島城へ登城しており、江戸へ向けて鹿児島を出発したのは、翌二十日であった。その後は薩摩街道を北上し、長崎街道へと入り、北九州の黒崎からは船で下関、その後も船を使って姫路まで登り、ここからは、陸路、西国街道から東海道を江戸へ向かっている。途中、宿場町の宿に休憩・宿泊しながら、江戸を目指した。宿に宿泊する際は、必ず宿亭主の名前を記すようにしている。失念した所は、空白にしていることから、その記入は必須と考えていたのであろう。

江戸上屋敷に到着したのが、同年十二月四日であった。そしてその日の七ツ半（午後五時）から着祝が開催されていることがわかる。同月二十六日まで江戸に滞在し、その間、高輪屋敷の見学や江戸見学を実施し、十二月十八日に江戸城へ登り、藩主からの奉書を將軍へ渡し

て拝領物を受けている。

こうして江戸での用事を済ませた後、十二月二十七日に帰路につき、また東海道を下っているが、復路は多くの観光をしていることがうかがえ興味深い。

さて、これら二冊の記録の筆者についてであるが、本史料には銘記されておらず不明である。表題の「紳」から考えると、自らの記録の名称を「紳」とすることができるのは、領主以外では家老級の役人であった可能性がある。二冊の記録とも筆跡が似ていることから、同一人物であると思われる。そこで手掛かりとなるのが、安政六年十月からの、江戸へ上った記録である。「都城島津家歴代史」によれば、安政六年四月に、藩主島津茂久（後の忠義）が將軍徳川家茂から「肴及び封書」を拝領しているが、その拝謝使として、都城島津家の島津久静が江戸へ上ったという記録がある。このときに「家老北郷資常以下を従えて江戸へ赴き、同十九日城に登り將軍家茂に謁す」（本史料の記録では十八日である）とある。また、道中の記述方法が、寛政三年（一七九二）に、江戸昌平覺に留学していた北郷資太郎資清が記した「東紀行」に類似していることから、彼から影響を受けた人物とも考

えられよう。したがって、久静の江戸行きに随行したことが明らかである当時の家老北郷資常、または資清の孫で、同じく家老であった北郷資韶と考えられる。

「北郷家庶流系図 坤」によれば、前者の資常は、家老であった北郷資韶の嫡男として文政七年（一八二四）十二月に生まれ、嘉永元年（一八四八）十二月に家督を相続、同七年九月に家老に就任している。また後者の資韶は、北郷資清の子である資要の嫡男である。彼は、文政三年三月に生まれ、嘉永六年七月に家督を相続し、同七年十二月に家老に就任している。注目されるのは、嘉永五年に「島津久静附近習役勤」を申し付けられていることである。こうしたことから考えると、久韶も江戸城への拝謝使には同行していたものと思われる、また、安政五年の「義烈塔」建設にも家老として大きな役割を果たしていた。さらに、この史料の記述方法が資清のものと類似していること等を考えると、最も影響の受けやすい久韶の可能性が高いといえよう。

以上、今回紹介する本史料は、幕末期における幕府や藩及び都城島津家の動向、都城島津家の家老の役割とその能力を具体的に知ることができる貴重なものである。

都城島津伝承館史料集 第十四号

「都城島津家役所日記 十四」

安政六 紳（日帳）〈安政六年（一八五九）〉
紳（日帳）〈安政六年（一八五九）〉

発行日 令和七年（二〇二五）三月三十一日
発行者 都城市教育委員会 都城島津邸

〒八八五―〇〇五五 宮崎県都城市早鈴町十八街区五号
〇九八六―二三―二二一六

印刷者 (有) 西田文栄堂

〒八八五―〇〇一六 宮崎県都城市早水町九号二番地一
〇九八六―二三―四四一八



都城島津邸

Miyakonojo Shimazu Residence